

## ワンポイント・ブックレビュー

阿部 真大著『搾取される若者たち バイク便ライダーは見た!』(集英社新書2006年)

本書は、大学院生である著者が1年間にわたりバイク便ライダーとして働き、その経験をもとに、『自分のやりたい仕事をみつけるべきである』といった趣味の仕事化に起因する現代的な労働問題に目を向けている。

第1章では、「『やりたいこと志向』が、なかなか仕事を始められない若者(ニートやひきこもり)を生み出している。このような指摘はすでに多くのところでなされている」ことを踏まえつつも、それでは「『やりたいこと』を仕事にした若者たちは本当に幸せなのだろうか」という問いかけをしている。そして、『やりたいこと』を仕事にした若者には「『やりたいこと志向』が生み出すワーカホリックの問題」があることを指摘している。このワーカホリックのことを著者は「自己実現系ワーカホリック」と名づけている。そして、著者はニートもワーカホリックも要因は同じく『やりたいこと志向』にあると捉えている。

ところで、本書で著者が問題視しているのは、若者のなかでも不安定就業にある若者の自己実現系ワーカホリックである。一般的にワーカホリックといえば、フリーターをはじめとした非正規労働者というより、長時間労働になりがちな正規労働者との関連性が強いようにも感じられる。「ワーカホリックになるフリーター、アルバイト」と聞いて、違和感を覚える人も少なくないだろう。しかし、フリーターなど非正規労働者として働く人たちの間にもワーカホリックとなる人がいる。本書では「自己実現系ワーカホリック」になる若者がいる職種としてバイク便ライダーのほかに、トラック運転手、ケアワーカー、SEをあげている。

ただし、自己実現系ワーカホリックになる若者にも“自己責任”という概念を適用すれば、それは若者自身の責任となる。しかし、著者は「不安定な仕事で自己実現をし、ワーカホリックとなることは非常に危険である。だから、やりたい仕事があっても、それが未来のない仕事であるならば、没入してはいけません。終わり。(中略)そのくらいのことは若者も分かっている。では、何が問題なのか」と責任のすべてが若者にあるわけではないことを明確にしている。そして、著者自らの就労経験から『職場のメカニズム』に原因があると指摘しているのだ。第2章以降では、バイク便ライダーの就業条件やライダーたちからの聞き取り調査をもとに、バイク便ライダーたちが仕事にはまっていくプロセスを描き出している。そして、最終章では不安定就業における自己実現系ワーカホリックへの処方箋を示すことを試み、若者たちが雇用の安定性を見分ける力を培う教育の必要性を提言するとともに(本書は『13歳のハローワーク』(村上龍)を度々取り上げて、「無責任な自己実現を促す職業教育」と批判している)、当事者である若者たちに対しては「競争ではなく連帯を」と呼びかけて本書は締めくくられている。

本書から考えさせられることは、若者に対する仕事への“動機付け”への評価である。動機付けは“やる気のない若者”対策として効果的と信じられるばかりで、それが弊害となる可能性はあまり検討されていない。近年、ワークライフバランスという言葉が注目を集めている。もし、ワークとライフのそれぞれが自立的に存在していれば、ライフはワークへの過度な動機付けへの防波堤ともなりうるだろう。しかし、不安定就業下にある若者にとって、ライフの充実化は金銭的にも、身分の安定性の面でも困難を伴う場合が多い。そのような若者にとってはワークとライフの一体化(ワーカホリック)によるライフとワークの充実化(=自己実現)は手っ取り早い手段になる。しかし、それは同時に、動機付けという内面への浸食行為が人の心にダイレクトに作用するリスクを伴っている。(O.S)